

難だつた事情もあり、海戦直後、我国はルーズヴェルト大統領に講和の斡旋を要請し、米国はここに日露両国に正式に講和を勧告したのである。

講和会議は八月、米国ニュー・ハンブシャー州ポーツマスで開始された。我国全権は外相小村寿太郎、露国全権は前蔵相ウキッテであつた。談判は樺太譲渡と軍費賠償にロシアが強く反対したため難航したが、結局我国が賠償金要求を放棄し、樺太南半の譲渡をロシアに承認させることで決着した。

九月五日に調印されたポーツマス条約の概要は

(一) 露国は、日本が韓国で政治、軍事、経済上の卓絶した利益を有し、かつ必要な指導、保護、監理を行なふ権利を承認す。

(二) 両国は十八カ月以内に満洲より撤兵す。

(三) 露国は遼東半島租借権を日本に譲渡す。これにつき両国は清国の承諾を得ること。

(四) 露国は東支鉄道南満洲支線(長春・旅順間)を付属の炭坑と共に日本に譲渡す。

(五) 露国は北緯五十度以南の樺太を日本に譲渡す。

このやうにして日露の死闘は終局した。これによつて我国は満洲と韓国をロシアの手中より救ひ出すと共に、我国自身の独立と安全を守り抜いたのである。

第五節 日露戦争と日本人

国家か自己か——主戦論者の苦惱

露国の満韓侵略の意図明白となり、我が口頭の抗議を以てしては、その野心を阻止し得ぬことが明らかになるにつれ、我が国民の対露敵愾心は燃え立ち、世論は沸騰した。露国が第二期撤兵を実行せざることの明瞭となつた明治三十六年六月に、富井政章東大教授等七博士は即日開戦の意見書を桂首相に提出し、対露交渉の行き詰まつた十二月には近衛篤磨を会長とする対露同志会が天皇に開戦を主張する意見書を奉呈するに至つた。

三国干渉以来十年、臥薪嘗胆の苦を忍んできた日本人も、露国の傍若無人の振舞に、遂に堪忍袋の緒が切れたのであつた。それまで日露開戦反対の主張をしてきた「万朝報」(社主黒岩涙香)さへもが百八十度立場をかへて主戦論に移つたのを見ても、対露開戦の気運の盛り上がり如何ばかりなりしかを知ることができよう。万朝報が開戦論に転じたため、その記者であつた内村鑑三、幸徳伝次郎(秋水)、堺利彦の三名が退社した話は余りにも有名である。では、万朝報が主戦論に転じたのは何故か。その理由を社主黒岩涙香は三名が退社した翌日の明治三十六年十月十三日の同紙上で次の如く論じた。

朝報は戦ひを好むか

内村、幸徳、堺の三君、非戦を唱へて朝報社を去る、朝報は戦ひを好むの主義なるか。一言にして答ふれば、

否と云ふの外は非ず、朝報は戦ひを好む者に非ざるなり。然らば何故に三氏が非戦論を抱いて朝報に在ること能はずと云ふか。是れは一言にして答へ得る所に非ず。読む人、気を平かにして之を思へ。

夫婦相争ふ。賊あり、外より之を窺ふ。思へらく乗ずべしと。戸を排して入り、財を掠めて去らんとす。夫婦争ひを忘れ、力を一にして之と戦ふ。これ家を思ふの至情なるか、はた戦ひを好む者なるか。この夫婦をば、以て戦ひを好む者となす可くんば、朝報社を目して戦ひを好む者となすを得ん。

として、朝報が前記三名と合はざる立場を下の如く述べる。

戦は避く可からざるか

吾人は我国五千万の忠良なる民人の一部として五千万と共に熱心なる平和の希望者なり。吾人が如何の心事を以て平和を希望するかは世の諒する所なるべし。然れども今や風雲漸く急にして戦ひの或は避くべからざる者あらんとす。事すでに是に至る。吾人は当局者の無能、よく平和を樽俎（外交交渉—筆者註）の間に維持し得ざることを責めざるべし。

真に戦ひの避くべからざる者あらんか、避くべからざるは即ち避くべからざるなり。局に当る者を助けて、戦ひに関する一切の手段を尽し、我の光栄と利益とを全くして速やかに平和を克復するに於て遺算なからしむることを要す。

戦ひの他国を敵とするは、これ海軍陸軍の戦ひに非ず、全国民の戦ひなり。五千万の忠良、悉く我が一身を以て戦うが如き覚悟を発し力を一にせざるべからず。平和克復の遅速は一に是にあり。

外交の手段すでに尽きて、戦ひの避くべからざるに至り、なほ戦ひを避けんとするは、医薬の手段すでに尽きて死の避くべからざるに至り、なほ死を避けんとするに似たらざるや。吾人故に曰へり、避くべからざるは避くべからざるなりと。避くべき道の絶無なるを云ふなり。すでに避くべからざるに至り、止むを得ず戦ふとせば国民

は如何にすべきや。局面のすでに一転し、外交期より戦争期に入りたるを無視し、依然として当局者のよく戦ひを避け得ざりし外交的拙策を咎むるに身を委ね、戦ひを顧みず差措くべきか、はた当局者を責むることを後日に譲り、国家の戦ひを自個の戦ひと思ひなし、挙国力を一にして戦ひに関する一切の手段を遺漏なく尽くすべきか、吾人は後者を選ばんとす。

これが当時我国の世論の大勢であつた。右の文章には、平和を希求する者が、やがて開戦論支持を決意するに至るまでの、内面的葛藤と煩悶が語られてはゐないか。開戦論者無思想にして盲目的愛国者の如く断じ去るのは誤りである。露国の侵略と祖国の危難を前にして、当時の日本人は「国家か自己か」といふ思想的煩悶を克服し、自己よりは国家の命運を重しとし敢然戦ひに赴いたのであつた。

このやうな思想的煩悶は今日なほ我々の課題である。国家の主権・独立・正義が他国に侵犯されんとする時、それを平和的交渉と説得で守り得ぬことが明白となれば最早干戈（かんか）によつてこれを守り、事の正否を決する他に途はないのである。真個の平和主義者は、その時、主戦論に転ずる。何故ならば、国家の正義がない所に、国家の成員たる個人の平和もないことを彼は知つてゐるからだ。不正の裡に存在する平和は、畢竟奴隷の平和でしかないことを知つてゐるからだ。斯かる人を軽々に好戦的とか軍国主義者とか右翼などと呼ぶことは許されない。一個の人間の中に於て、平和論が已むを得ず主戦論に転換してゆくその思索的過程と苦悩を正しく評価する度量こそ、現代人のなほ必要とするものではなからうか。

浅薄粗雑な幸徳秋水の反戦論

所で、開戦論に反対して万朝報を退社した幸徳、堺らは、反戦機関紙「平民新聞」を発行した（創刊号は明三六・一一・一五）。彼らの反戦思想とは何であつたらう。翌明治三十七年開戦直後の議会で増税案が通過した時、「平

民新聞「二十号は「嗚呼増税」の一文を載せて、かう主張した。「嗚呼「戦争のため」てふ一語は、有力なる麻醉剤なるかな。嗚呼六千万円の増税、重荷なる増税よ、これ実に「戦争のため」なるべし。然れども如何に戦争のためなりとて、之を負担する国民の苦痛は、依然として苦痛なるべからず。而も何故に国民は斯くの如き苛税に忍ばざるか。彼等は答ふ、「戦争のために」止むを得ざるなりと……今この国際戦争が、単に少数階級を利するも、一般国民の平和を攪乱し、幸福を損傷し、進歩を阻害するの極めて悲惨の事実たるは吾人の屢々苦言せる所なり。而も事遂に至れる者、一に野心ある政治家之を唱へ、功名に急なる軍人之喜び、奸猾なる投機師之に賛し、而して多くの新聞記者之に付和雷同し、競ふて無邪気なる一般国民を煽動教唆せるのみにあらずや」と。

日露戦争が「単に少数階級を利する」ものであつたか、「一般国民の平和を攪乱し、幸福を損傷」するものであつたかについては、もはや反論するまでもない。「進歩を阻害する」と云ふに至つては、日露戦争が、アジア諸民族を覚醒せしめ、その独立運動を促進する契機となつた歴史事実と全く相容れないものである。「野心ある政治家」「功名に急なる軍人」等が対露戦争を導いたとの主張が根柢なきばかりか、事実と正反対なることは、今更説くまでもないことであらう。

幸徳秋水らの斯る粗雑な反戦思想が、賢明なる日本国民の受け容れる所とならなかつたのは当然であつたし、又国家国民のために幸ひなる所でもあつた。この一文のため「平民新聞」は発売禁止となつたが、戦争といふ非常時に於て斯かる無責任な亡国の主張が取締りの対象とされたのは当然過ぎる程のことであつた。

「君死にたまふこと勿れ」——無責任な世迷言

日露戦争に於ける反戦気分を殊更に強調せんとする論者は、女流歌人と謝野晶子が、出征中の弟を歌つた歌「君死にたまふこと勿れ」(「明星」明治三十七年九月号)を引用するのが常道である。高校用歴史教科書の日露戦争の項

に、この歌を紹介してゐないものは皆無と云つてもいいくらいだ。

この歌は、戦争と云ふ国運をかけた非常時に、堂々と雑誌に発表されたのである。これを自我の覚醒とか、人間感情の率直な表現などと無条件に称賛する向きが多い。併しながらこの詩は大胆率直ではあるが、自分一個の感情を絶対視する余り、時局の重大さも国の命運も思はぬ無慮、無責任、節度なき独善の泣き言以上のものではない。出征する肉親が無事であることを願ふ気持はひとり謝野晶子のものではなく、時と所を問はず人間普遍の感情である。しかし、それを公表するに於ては文人としての責任と謙抑を知らねばならぬ。

この歌と、同じ歌人が後年に詠んで発表した歌とを比べてみるならば、蓋し、思ひ半ばに過ぐるものがあるのではないか。大町桂月が雑誌「太陽」で謝野晶子を「乱臣なり賊子なり」と非難したのは理由のないことではなかつた。

(註) 謝野晶子が満洲事変及び大東亜戦争当時詠んだ歌は後述する。

同じ雑誌「太陽」に載つた歌人大塚楠緒子の長詩「お百度詣で」は

一と足ふみて夫思ひ、

ふたあし国を思へども、

三足ふたたび夫おもふ、

女心に答ありや。

かくて御国と我夫と

いづれ重しとはれなば

ただ答へずに泣かんのみ

と歌ひ、これまた人間の偽らぬ心情の吐露として、日露戦争批判の材料として屢々引用されるものである。

しかし、「君死にたまふこと勿れ」にせよ、「お百度詣で」にせよ、取り立てて騒ぐ程の歌ではない。人間だれし

も平和を願ふのであり、骨肉の情なき者は居ない。にも拘らず、国の大事と思へばこそ、自己を滅して深く戦場に向ふのである。涙をかくして死地に赴くのである。それは偽善でもない。国策の道具たることでもない。各個人の内面に於ける、密かな、しかし尊くも厳肅なる人生正念場の大決断なのである。だれが殺を好んで戦場に赴くであらうか。これを嗤ひ、かの女流歌人の閑文字を「人間の真実」と称賛する者は、その人間観に於て皮相、偏狭、独善の誹を免れることはできない。

一部の反戦論にも拘らず、国民大多数は時局の重大なる意味をよく諒察して国の大事に殉ずる決意を固めた。政府が戦費調達のために募集した国債の応募数の多きを見て、^(註)国民が上下一致、戦争に協力した様を知ることができ。幸徳、堺や与謝野晶子の如き反戦思想が国民世論の主流であつたとしたら、日露戦争の結果は如何なるものになつたであらうか。満洲、朝鮮はもとより、我が日本自身も、露国の支配する所となつたであらう。

日本の史書は、幸徳秋水や与謝野晶子に多くの紙面をさくよりも、死して護国の鬼たらんとて満洲の野や、黄海、日本海の波間に肉弾と散り果てた十万の有名無名の将兵について語り継いでゆくべきではなからうか。日本の、そして我々の今日あるは、間違ひなく彼ら忠勇なる将兵の戦ひと犠牲のお蔭だからである。

(註) 明治三十七年三月に発行された内債第一回一億円は申込数一三四万、応募額四億五千万と、募集額の四倍以上に達した。第二回一億円は同年六月に、第三回八千万円は十一月に募集されたが、いづれも応募額は募集額の三倍以上に達した。

国民がいかにか戦争目的を理解し、協力したかが分からう。これらの公債に応募したのは富豪階級ばかりでなく、中産階級以下の者も、その日の生活を節して応募する風であつた。また金の不足を補ふといふので、婦人達は競うて指輪かんざし等の装飾品を提供し、応分の奉公に努めたのである(渡辺幾次郎「日清・日露戦争史話」)。

因に外債は、第一回目は英米で夫々五〇〇万ポンド募集されたが、英国では三一倍、米国では五倍強といふ非常な人気で、日本の勝利を願ひ確信する英米国民の気持ちを実に反映するものだつた。

米英で外債募集に当つたのは高橋是清であつた。高橋は第一回の募集は五〇〇万ポンドに止めるはずであつたが、米銀行家ニューヨーク・クーンロエブ商会のジエイコブ・シッフが義侠的に五〇〇万ポンドを引受けて米国で同商会とナショナル・シティ銀行を通じて発行することを引受けてくれたのである。ユダヤ人のシッフは、ロシアで迫害されているユダヤ人を救ひ出すために日本が勝つのを望み、快援を提供したのであつた。

東郷元帥を抹殺する教科書

反戦思想の紹介には惜しみなく紙面を割く我国の歴史教科書だが、不思議なことに日露戦争の勝利に貢献した人物には一行の評価も記さうとしない。これらの教科書の執筆者達は、我国の勝利を心外とし、憎悪するが如くである。

それを示す最近の事例は、昭和六十三年五月、小学校社会科で教へるべき歴史上の人物の中に東郷元帥が登場したことに対する朝日新聞など一部左傾マスコミの批判キャンペーンだ。よほど新聞が恐いのか、当時の中島文相はいち早く東郷元帥を取り下げてしまった。だが翌平成元年二月、文部省(西岡文相)が発表した学習指導要領改定案で、東郷元帥が小学校高学年の社会科で教へるべき人物として復活したことは記憶に新しいところであらう。

これについて、依然とかくの論議があらうことは容易に想像されるが、問題は結局、日露戦争をいかに理解するかにかかつてゐる。日露戦争が我国の歴史上、鎌倉時代の元寇に比すべき一大国難であり、中でも日本海海戦が戦ひの帰趨を決した重大意義を有する大会戦であつたことはすでに説き来たつたところだ。この海戦に敗れて、ロシアは初めて米大統領の講和斡旋に応じたことを思ふべきであらう。

東郷平八郎の指揮する我が連合艦隊が、仮にバルチック艦隊に敗れたとせよ。大陸への我が兵站補給線は断ち切れ、満洲の日本軍部隊は陸続増派される露国大軍を前に孤立し、全滅する他なかつたであらう。バルチック艦隊は日本本土を砲撃し、露国は日本上陸作戦さへ敢行したかも知れない。旅順が奪回されたであらうことは云ふ迄も

ない。

斯くして我が国が日露戦争に敗北していたとするなら、その後のアジアの運命は如何なるものとなつたであらうか。全満洲、全朝鮮はロシアに併呑され、我国自身の独立もまた重大なる危機に瀕したに違ひない。

アジアに於て、ロシアが一度占領した地域を放棄した例は、日露戦争に敗れて朝鮮、満洲から撤退したことを以て最初とする。平成元年二月のアフガニスタンからのソ連軍撤兵は、実に日露戦争以来の事件なのである。これを思へば、日露戦争や日本海海戦の深刻なる意義の一半は多分理解され得るであらう。

(註) 朝日新聞の不見識 小学校社会科授業に於ける東郷元帥の登場を大きく取上げて批判したのは昭和六十三年五月十六日付朝日新聞であつた。ところが同紙は一面トップで東郷元帥問題を批判的に報道しながら、それと並んでソ連軍のアフガニスタン撤退開始の記事を掲載してゐるのである。ソ連軍のアフガニスタン撤退がそれ程に重大ニュースであるならば、東郷で初めてロシア軍を敗退させた日露戦争の功労者たる東郷元帥の歴史上の意義は更に重要であり、その教科書登場は当然のことながら、歓迎すべきニュースである筈だ。なのに、ソ連軍のアフガニスタン撤退はこれを一応歓迎するかの如くでありながら、日露戦争での我が勝利とそれに貢献した人物を歓迎しない朝日新聞の報道姿勢は、ロシアの東亜侵略史に対する恐るべき無知によるものでなければ、甚だしい政治的偏向と反日思想の結果と云ふ外あるまい。いづれにせよ、不見識極まる恥づべき紙面であつた。

因に日本海海戦の後、英国各紙はこぞつて我国の勝利を絶賛したのであつた。デーリー・メール紙は「トラファルガーの戦勝を凌駕す」と題する社説を掲げ、スタンダード紙は、日本海海戦は「よく人の機械に勝れることを証明せり」と我軍の資質の高さを勝因となし、この勝利で今後少なくとも数年間は平和が来るであらうが、暴君ロシアの報復に警戒すべきことを説いた。またデーリー・テレグラフ紙は日本海海戦を「特筆大書すべき」と述べ、英国の同盟国たる日本が「千古未曾有の戦勝を結ぶに、赫々たる戦略を以てして、よく東洋に雄飛」することを祝すと書いたのであつた(明治三十八年六月二日付「大阪毎日」)。これら当時の英紙の報道と、あれから八十年以上を経て日本海海戦の歴史的意義も十二分に検証済みの

時期に書かれた朝日新聞記事の示す見識の低さを比較してみるとよい。

英国にトラファルガー海戦に於けるネルソンの名を知らぬ児童は一人もゐないと云はれるが、今日の日本に東郷の名を知る生徒は皆無に近く、否、教師自身が日露戦争の意義を解してゐない現状である。

鎌倉時代の元寇と明治の日露戦争——この二つは我国の経験した最大の国難として歴史教科書に大書し、また生徒の胸中に深く銘記されるべきものと筆者は信じてゐるのであるが、現に六百有余年前の元寇撃退の重大な意味が認識されたのも日露戦争が始つてからのことであり、戦ひ 酬(よすが)の明治三十七年五月、明治天皇は元寇に於ける執権・北条時宗の功績を追想され、鎌倉・円覚寺に眠る時宗に従一位を追贈されたのであつた。

当時の日本人にとつて日露戦争とは斯くの如き戦ひであつたことを思へば、東郷元帥の教科書登場は遅すぎた位であらう。

対外広報に着目した日本

政府は対露開戦の決定と共に、米国へはハーヴァード大学でルーズヴェルト大統領と同窓であつた金子堅太郎男爵(当時)を、また英国にはケンブリッジ大学を卒業して同国の事情に精通し、伊藤博文の女婿たる末松謙澄男爵(当時)を派遣することにした。その目的は、日露戦争が、日本の平和努力にも拘らず、露国の行動のために余儀なくされた自衛戦争なることを両国国民の脳裡に徹底せしむること、欧米人の思想中に伏在し、露国が鼓吹しつつある黄禍論を抑へつつ、両国の親日世論を醸成し、特に米国については、他日講和調停を依頼したいので、米大統領と米国民の対日感情を良好ならしむることであつた。

戦争に際して、軍備のみならず、第三国の世論形成を図り、他日の講和を有利に導くと云ふ我が政府当事者の見事なる深慮遠謀をここに見てとることができよう。

伊藤が金子に渡米を依頼したのは、二月四日、対露開戦を決定した御前会議の日の晩であつた。米世論を動かすことの難しく、成功の見込なきを理由に渡米を辞退する金子に、伊藤は、「今度の戦争で成功すると思ふ者は一人も居らず、事ここに至れば国を賭しても戦ふの一途あるのみ。かく云ふ伊藤も、我が陸軍が満洲から追払はれ、海軍が対馬海峡で悉く沈められ、露軍が我国に迫つた時は、身を士卒に伍して鉄砲を担いで、山陰道か九州海岸で命の限り露軍を防ぎ、一步たりとも敵に日本の土地を踏ませぬ決心である。君も成功・不成功を問はず、あらん限りの力を尽くして米国人が同情を寄せるやうにやつてくれ」と説いた。されば金子も「三寸の舌のあらん限り」米国民を説得すべく、訪米を諾したのであつた（金子堅太郎「日露戦役秘録」）。

米国に着いてからの金子は、ルーズヴェルト大統領はじめ各界の士と交流し、また機会ある毎に演説を行なつた。彼の説くところ、対露戦争が日本にとつては正義の自衛戦争なること、日本は露国が宣伝するが如き野蛮国にあらずして、維新以来、着々と文明開化の実を挙げて居ること、此度の戦争に於ても、日本は露国とは違つて国際法と人道を忠実に遵守していることなどに留まらず、日本の歴史や国民精神にまで及んだのであり、その卓越した英語による名演説が正義感の強い米国民に与へた影響は甚大であつたと云へよう。金子の活動については次節で触れる。

他方、英国では末松が、「日本側が今回の戦争を近世文明の精神を以て実行すべしとのことを、公衆に向かつて反覆説示」するに努めてゐた（松村正義「日露戦争と金子堅太郎」）。

宣伝の不得手な日本人が、日露戦争に際しては、いち早く欧米に於ける広報活動に着眼し、かつ成功したことは注目すべき事実と云へるだらう。その後の日本の外交戦略に於て、広報・宣伝と云ふ視点が稍もすれば軽視されがちであつたことは、我が国民性の然らしむる所とは云ひながら、顧みて惜しまれることである。

第六節 日露戦争の世界史的意義

アジアは日本の勝利に興奮した

日露戦争の重大意義は、アジア及び世界の抑圧された民族に希望と自信を与へ、その民族独立運動を促したことだ。なにに我國の歴史教科書は、日露戦争のこのやうな世界史的意義について一行の紙幅も割かうとしない。

地理上の発見以後、アジアは年を追ひ、世紀を追うて西力東漸の波に洗はれ、白人国家の圧迫と支配を受けるに至つた。十九世紀末から二十世紀初頭にかけて、アジア太平洋地域の諸国は西洋列強の植民地となるか、領土の一部を侵奪されるか、いづれかの運命の下におかれてゐた。その唯一の例外は我が日本だつた。日本だけが、当時アジアで唯一の完全な独立国家であり、立憲政体と議會制度と近代の軍隊を持つてゐた。アジアで、憲法と議會を有する国は他に存在しなかつたのだ。

日露戦争は有色人種の白色人種に対する勝利であり、また立憲国家の専制国家に対する勝利の戦ひでもあつた。日本の輝かしき勝利が、西洋列強の桎梏下に呻吟するアジア後進諸国に与へた衝撃は甚大で、日露戦争は全アジアを覚醒、奮起せしめ、ここに民族独立運動は澎湃として起り、広がつて行く。

「アジアは日本の勝利を跳び上がつて喜んだ」と『日露戦争全史』の著者ウォーナー夫妻は書いてゐる。独立の気運はフィリピン、ベトナム、ビルマ、インドネシアなど東南アジア全域に及んだ。

インドもさうだ。「日本の情熱が私の情熱をかき立てた……民族主義的な思想が私の心を満たした。私はヨーロ